

令和3年度 まちのひろば創出職員プロジェクト 報告書

●職員プロジェクトメンバー

- ・建設緑政局 緑政部みどりの協働推進課 岡麻由美職員
- ・財政局 かわさき市税事務所納税課 堀澤美佳主任
- ・教育委員会事務局 学校教育部幸区・教育担当 能塚正輝担当係長

●職員プロジェクトサポートメンバー

- ・健康福祉局 総務部保健福祉システム課 小林愛職員
- ・こども未来局 総務部監査担当 児玉大樹職員
- ・建設緑政局 広域道路整備室羽田連絡道路建設担当 徳永詩穂職員
- ・環境局 環境対策部地域環境共創課 上仲彩主任
- ・宮前区役所 まちづくり推進部企画課 山田将史係長
- ・教育委員会事務局 教育政策室 区教育・事業調整担当 鈴木政康指導主事
- ・臨海部国際戦略本部 臨海部事業推進部事業推進担当 藤井英樹担当課長

●事務局

- ・市民文化局コミュニティ推進部 協働・連携推進課



プロジェクトメンバーとサポートメンバー

1 概要

本市は、暮らしを取り巻く社会環境の変化を見据え、市民一人ひとりが多様なつながりをつくり、自分らしく幸せに暮らせる地域社会の実現を目指して、平成31（2019）年3月に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」（以下「基本的考え方」という。）を策定し、地域レベルの新たなしくみとして、多様なつながりを育み、誰もが気軽に集える出会いの場として、多様な地域資源を活用した地域の居場所を「まちのひろば」と名付けて創出していくこととしています。

この取組を推進していくためには、行政としても、公共施設の地域化、民間資源の活用推進及び「まちのひろば」の自主性や自律性を尊重した支援などを進めるとともに、「市民創発」がもたらす様々な変化や動きに呼応することが求められていることから、職員の意識改革と人材育成が必要です。

こうしたことから、職員参加と意識改革の推進及び「まちのひろば」の見える化を目的に、職員自らが地域に出て「まちのひろば」のモデルを実践していく、これまでにない庁内横断型のプロジェクトチームを、令和元年度に新たに設置し、地域の方など多様な主体と連携しながら多くのモデル実践を行い、新たな「まちのひろば」を生み出してきました。



地域に広がるまちのひろば 希望のシナリオのイメージ

2 これまでの取組

(1) 令和元年度

取組初年度ということもあり、若手職員を中心に多くの応募があり、オブザーバ2名を含め22名での活動となりました。活動は、4つのグループに分かれて行いました。

- ・古い木造住宅が多い密集市街地の火災の延焼防止や災害時の一時避難場所として設けられる「防災空地」を活用したマルシェの実施。
- ・市内大企業の配水所未利用地の有効活用を目的とした「FUSOグリーンガーデンを活用したまちのひろばの創出について」の取組。※悪天候によりイベント実施せず
- ・飲食店と連携したスナックやJR川崎駅コモレビテラスでのワークショップの開催等、地域の声を具現化した「まちのこえをカタチにするプロジェクト」の実施。
- ・NECの公開空地を活用したイベント実施やNEC玉川事業場との共創によるさまざまなイベントの実施。



飲食店と連携したスナック「日進町コミュニティスナック」

(2) 令和2年度

新型コロナの感染拡大により、これまでと同様の手法で顔を合わせて集うことが難しくなり、「新しい生活様式」に対応した「まちのひろば」づくりの必要性が求められることとなったことから、令和2年度については、新しい取組を行うのではなく、令和元年度の取組を深化させながら、「新しい生活様式」に対応した新たな居場所やつながりづくりを実践していくこととし、テーマを「まちのひろば with 新しい生活様式」の創出としました。

令和元年度の取組の中で継続実施する2つの取組（小田の防災空地、NECの公開空地を活用したイベント）を中心に、新しい生活様式に対応した「まちのひろば」づくりを実践することとし、昨年度からの継続メンバーを含めた15名が3グループに分かれて活動することになりました。

新たな取組として、働き方改革や職員の人材育成の観点から勤務時間外に自主的な活動として参加できるサポートメンバーを募集し、集まった8名のサポートメンバーも可能な範囲で取組に参加してもらうことになりました。



地元町内会と協働した小田防災空地で実施したマルシェ

3 今年度の取組

(1) テーマ

今年度は、事務局2名を含めた5名で3つの事業を実施しました。依然として、新型コロナウイルス感染症の影響が続いていることから、コロナ禍における新しい生活様式の意識を持ちつつも、新しいテーマで取り組むこととしました。一つ目は「公共施設の地域化から生まれるまちのひろば」です。積極的な公共施設の有効活用の先進事例となるような取組を目指し、「まちのひろば」創出のモデル事業を実施するものです。二つ目は、「自由な型で創

出するまちのひろば」公共・民間施設の場所を限定せず、自由な発想で「まちのひろば」創出のモデル事業実施を目指しました。

「公共施設の地域化」とは？

未利用の公共施設を積極的な地域利用の促進を図る取り組みのことで、「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」においても、「まちのひろば」への行政の関わり方として、庁舎や学校、こども文化センター、いこいの家等について、より自由度の高い活用に向けた地域での利用ルールの決定や、その管理・運用への参加を促進する等、地域化に向けた取組を積極的に推進しています。

(2) キックオフ会議

8月上旬に生田出張所で行われたキックオフ会議では、プロジェクトの概要説明や、過去の職員プロジェクトの取り組みについて事務局から説明を行いました。また自己紹介を含め、今年度取り組んでみたい事業などを話しました。その後は生田出張所を視察し、まちのひろばの可能性について意見交換を行いました。



生田出張所でのキックオフ会議

(3) サポートメンバーとのオフサイトミーティング

8月中旬には今年度のサポートメンバーを交えてオフサイトミーティングを行いました。メンバー同士の交流企画として「こころかるた」を使った質問ゲームや、他己紹介を行いました。また、自分の考えや相手の考えを知り、新たな視点を獲得することを目的に「まちのひろば」をテーマとした対話を行いました。対話では、車座になり「まちのひろば」について、絶対的な答えはないということを前提とし、固定観念にとらわれずに幅広い考え方を聞く、話す、というルールで各自の想いを話しました。「そもそも、まちのひろばは自然発生的にできていくもの。でもなぜ行政がまちのひろばを施策として主導するのか」「ライフステージが変わり、新しい場所でのようなまちのひろばと関わればいいのか」など、様々な問いが出ました。当日は本格的な対話を行う時間がなく、問いを出すだけで終わってしまいましたが、各人が想いを持ってこの職員プロジェクトに関わっていることがわかり、今年度どのような事業を行っていききたいか、少しでも形が見えました。



対面（写真上）とオンライン（写真下）の両方を用いたミーティング

(4) 具体的な取組内容

9月になると具体的にどのような事業を実施するのか、メンバー間で議論を重ね、キーワードとして「オンラインでのつながり」「多世代交流」「多摩川」が挙がり、早速現地視察に出掛けて、現場でのニーズを探りました。

現地視察や関係者の聞き取りの結果、(1) W i t h コロナの時代に合ったまちのひろばのひとつとして、オンラインシステム (Zoom) を利用した交流を傾聴ボランティアの方とともに進める、(2) 3月開通予定の多摩川スカイブリッジで「まちのひろば」創出のきっかけとなるようなイベントを行う、(3) 川崎区日進町にある複合施設「ふれあいプラザかわさき」において、多世代交流できるイベントを行うという3つの事業に絞られました。

ア ロビーを活用した多世代交流事業ふれあいプラザかわさき

(教育委員会事務局学校教育部幸区・教育担当 能塚正輝担当係長)

(ア) 最初に

今年度はメンバー3名体制と少人数ではありましたが、その分それぞれの思いをより深く盛り込みながら、企画検討・実施まで進めました。サポートメンバー、事務局には、様々な示唆や提案等多くのサポートをいただきました。メンバーのみならず、プロジェクトに係った「全員」で常に各企画の協議・検討を進めてきた、という点をまずお伝えしておきます。

(イ) ふれあいプラザかわさきとは？

かわさき老人福祉・地域交流センター（以下「老人福祉C」という。）、日進町こども文化センター（以下「こ文」という。）の他、視覚障害者情報文化センター、わーくす川崎、シルバー人材センターで構成されている3階建複合施設です。



施設全体の管理者である老人福祉C（1・2階）

平成26年4月1日開所のふれあいプラザかわさき

は、高齢者の相談対応及び健康や教養・レクリエーションのための講座、サークル活動の支援、また地域の方の交流の場としても活用されている施設です。ひとつの建物を使って異なるふたつの事業【市内在住の60歳以上の方が利用する『老人福祉センター』（原則無料）と、年代問わず市民の交流の場を提供する『地域交流センター』（有料）を、利用時間帯を分けることにより行っています。また同建物内にはこ文（3階）があります。

令和3年度プロジェクトのテーマとして「公共施設の地域化」が掲げられており、私は元々市民館での勤務歴が長かったこともあって「公共施設の中で様々な世代の利用者が気軽に交流できる空間があればよい」と常々考えてきました。それが応募した動機でもありません。その点からも同施設は企画を具現化するのにとても適しているのではないかと考えました。他にも3施設が入っていますが、以上の理由から今回は上記2施設を企画検討の主体としてプロジェクトをスタートさせました。

(ウ) そもそものきっかけは？

話を少し戻します。9月1日に第2回の企画会議が開催され、「かわさきで、〇〇できるといいな」をテーマに、事前にメンバー各自で、また周りの知人や職員にもヒアリングを行いキーワードを出し合いました。8月のサポメンとのオフサイトミーティング（第1回）でもまちのひろばに係る様々な思いを聞くことができました。

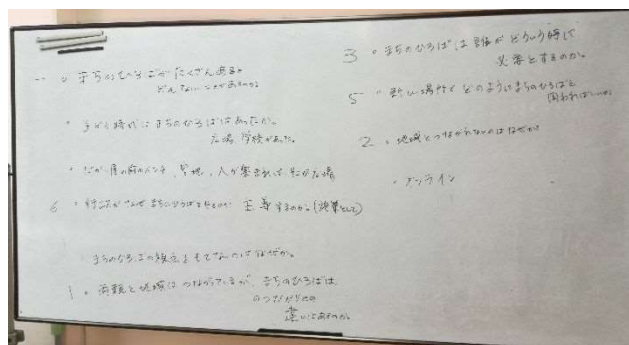
自分なりに響いたキーワードとしては（抜粋）

「ほっとできる空間」「さりげなさ」「バリアフリー」「多世代交流」「居場所を求めている方

にどう届けるのか（マッチングさせるのか）」など。

例えば川崎市で生まれ、一定の年数を地元コミュニティの中で生活してきた方は、最初から大なり小なり地域のつながりの中で暮らしています。しかし一方で、例えば子育てのタイミングで川崎市に転居してきた方はどうでしょうか。新たなコミュニティの中で、模索しながら生活を再スタートさせていく必要があります。「まちのひろば」は、そういった後の方が新たなコミュニティへ参加するきっかけづくりのためのサポート機能を果たすべきでは？、そういう問いが自分自身にありました。

もう一つの重要な点は、最初の居場所づくりから運営が軌道に乗るまでを市民主体で行うための準備及びスキーム作りです。単にイベントを行うということだけではなく、今後につながっていく持続可能な形、なるべく無理なく続いていく新たなコミュニティの形を構築する必要がありました。



企画会議での意見出し

その中で、「川崎区に複合施設がある」「同じ施設内だから交流しやすいのでは？」「近隣公園を使用しての連携事業も可能では」「比較的新しい施設であり、多世代の新たなコミュニケーション創出の可能性、模索ができるのでは？」といったメンバー内での意見交換がなされました。その結果選んだ場所が「ふれあいプラザかわさき」だったのです。

(エ) 早速施設見学！

コンセプトが決まれば動くのみです。こ文館長（9/16）、老人福祉C所長（10/6）それぞれの施設管理者を訪問、現況・課題のヒアリングを行いました。実際に施設を訪問してみると、1階に吹き抜けの広いロビーがあり、利用状況を確認したら、老人福祉Cの職員が時折季節の飾りつけを、また利用団体が行事・活動の掲示をしているとのこと。壁面はすりガラスでとても明るい利用可能な空間でした。

「これだ！使える！」施設利用者の誰もが通る1階ロビーに、気軽に立ち寄れる、癒しの空間を作り出せないか？明確なビジョンが見えた気がしました。



日中のロビーは大きな窓から日差しが差し込む



こ文字佐美館長へのヒアリング

以下、関係施設ヒアリングからの抜粋です

〔こ文〕

- ・感染症対策による利用制限が継続、主催事業の中止及び延期多数
- ・団体向け貸館利用を行っており、利用団体が参加する運営協議会は年に数回行われている
- ・21時まで開館（制限時は20時まで）、夜間は利用が少ない
- ・中高生の居場所としての活用方法があればよい
- ・参加者の役割や目的を充足させたうえでの多世代交流イベントの実施の可能性

〔老人福祉C〕 ※施設全体の管理者

- ・老福Cは利用の年齢条件あり、原則利用無料、月～土 9～16時まで
入浴、健康相談、囲碁将棋、カラオケ、各種行事（カラオケ、卓球、入浴設備等が人気）
- ・地域交流Cは貸館（有料）、利用は月～土の夜間、日曜祝日の9～21時
- ・1Fのロビーで職員が季節の飾りつけを年数回行っている、スペースは利用できる
- ・つどいを年2回開催（現在は縮小または中止）
- ・貸館の団体間の連絡会は行われていない

（オ）オフサイトミーティング（第2回10/16）での意見交換 ～今後の展開へ

オフサイトミーティングでは、ブレインストーミング的手法を用い、制限を考えることなく、思い付きから自由に発想していくことで様々な意見を出し合いました。まず企画側が楽しくなければ意味がない、始まっていかない、そう思いました。

（ミーティングまとめ）

- ・1階ロビーの活用
複合機能施設として、いろいろな人（こども～高齢者、障害者など）が通るスペース。施設内で唯一交わるスペース（結節点）を活用しない手はない。

<例えば…>

- ・囲碁、将棋、オセロをロビーに設置することでこどもと高齢者の交流を促進
- ・駄菓子屋を開いて高齢者等がこども向けに販売
- ・テーブル・椅子の向きを会話が生まれるように設置（要感染症対策）
- ・ピアノ（こ文から移動。難しければ簡易電子ピアノ設置）
- ・自由な意見交流ができる伝言板（黒板など）日常の困りごと、不用品等の記載
- ・作品展示、ギャラリースペースとして、長机・パーテーション等の設置
- ・イベントの定期的な実施（3密対策に配慮）
- ・フリーマーケット、よろず相談コーナー

以上を踏まえ

⇒施設利用者等の関係者による1Fロビー交流事業企画委員会（仮称）の設立の提案

⇒ロビーの活用方法について、同館の利用団体等を巻き込み検討会議実施後、試行実施してみる。そのためにまずは、主体的に検討してくれる団体等が必要なので、施設内の掲示板で企画検討会実施のチラシを掲出してみる。

※ロビーを活用する事例は様々ありそうなので過去事例を調べてみる

※交流事業に継続的に関わる団体（人材）、実施主体の育成、組織化

（カ）両施設管理者への企画提案（11月16・17日）

事務局が中心となり、ロビー活用に係る具体的な企画提案を両施設の管理者にプレゼンしました。概ね好意的に受け止めてくれたと感じました。ただ、管理者の負担増にならないよう配慮の上で、今後も事業を進めていくことが必要でした。

（キ）こ文館長提案による運営協議会（12月20日）でのプレゼン・企画参加協力依頼

こ文字佐見館長に提案してもらい、企画参加者を募る目的で、駄菓子屋などの交流イベントに加え非接触型の交流（掲示板など）も内容に盛り込み、ロビー交流事業の提案及び企画委員募集の趣旨でプレゼンを行いました。

運営協議会には、様々な利用団体の代表の方が参加されています。「私たちは無理…」「なんか違うよね…」そういう声もちらほら聞こえてくる中、協議会長にご協力をいただけることとなり、また企画参加してもいいという賛同者の方も現れ、とても有難かったです。引き続き企画メンバーは継続募集していきます。

一から十までご協力いただきました宇佐美館長には感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

（ク）ミニこ文祭り（1月6日）での実地アンケート

こ文字佐見館長にお願いして、1コーナーを設置させていただき、お祭りのお手伝いをさせて頂きながら、子どもたちに「1階ロビーでやってみたいこと」を直に聞き取り、アンケートを行いました。実際に子どもたちの声を聞くことで、独りよがりではなく企画内容を再確認したかった思いがありました。結果は「駄菓子や」が想定以上に人気を集めました、他にもお絵描き、鉄道模型、ファミコン、オセロ、クレーンゲーム等。キーワードは郷愁、多世代、昔遊び、懐古調など？気軽に「楽しそうだな、少し寄ってみようかな」と感じてもらえるようなイベントを目指したいところです。

ただ、みんな駄菓子屋にいったことがそもそもあるのでしょうか？（駄菓子は市販されてはいますが）、なんとなく直感的に興味を持ってくれたのでしょうか。答えは交流イベント本番で



ロビーでやってみたいことをアンケート

わかるような気がしました。

(ケ) 企画委員会（1月21日）開催

企画委員2名、こ文字佐見館長が参加し（老人福祉C中嶋所長は欠席のため別途説明）、改めてプロジェクトメンバーから趣旨説明、そして意見交換を行いました。

（説明および意見交換 メモ）

- ・テーマは多世代交流＋公共施設の有効利活用（プラザが複合施設である点に着目）
- ・当日にダンスのデモンストレーション、メンバー広報を行うことは可能か
- ・同じように子育て関係の活動を行っていて、それを広めたいと考えている運営協議会関係メンバー等に声をかけて、その回ごとにデモを行い、イベントを展開していくことはどうか（メンバー募集も行う）メリットがあれば参加してくれるかもしれない、WINWINの関係が無いと来てくれない
- ・ボードゲームの販売業者に、新作をデモ展示してもらい、宣伝販売がOKなら来てくれる可能性はあるかもしれない
- ・皆忙しい、毎回来られるボランティアはいないだろう
- ・集客を考えるなら、学校のいらなくなった物品を販売する、リサイクルバザーなども考えられる
- ・企画をあまり欲張っても大変
- ・囲碁、将棋を設置することで、老人福祉Cの利用者が来てくれないか
- ・老人福祉C中嶋所長から

→2月19日（土）、春祭り（後日：中止）で、1階ロビーに団体の活動展示を設置、ホールで実演、福祉施設のパン販売も行う予定。施設管理上は駄菓子販売も問題はないだろう。

当初、イベント開催日を2月中旬に想定していたものの、感染状況が落ち着くだろうと予想しイベント開催日を3月19日に決定しました。ところが、2022年の年明けから一気に第6波による感染者増の様相を呈してきました。1月21日にまん延防止等重点措置の対象に神奈川県がなった以降、措置期間は2回延長されることとなります。

(コ) イベント実施に向けて

神奈川県にまん延防止等重点措置の2回の延長により3月21日までと決定された以降、施設管理者とは感染症対策を徹底した上での実施を確認しました。

イベント内容は、アンケートでも人気が高かったものを中心に選定。駄菓子販売、消えるクレヨン「キットパス」を使った窓ガラスへのお絵描き、めんこ・けん玉・紙風船・お手玉・めんこ・輪投げ等の昔遊び。企画委員さん提案の小中学生用品のバザーとその委員さんがインストラクターを務めるエクササイズ（カリブ発祥の陽気な音楽にのせて行う「ソカサイ

ズ)に決定。バザーを目的に来庁した女性にはエクササイズも体験してもらいたいという思いから、バザーとエクササイズを午後を実施することとし、その他は午前中に実施することにしました。イベント広報は、市ホームページ、こ文運営協議会会長の協力のおかげで近隣町会(下並木町会・日進町町内会・池田町内会)掲示板へのチラシ掲出、企画委員から知人への声掛け等、多方面で広報展開を行いました。宇佐見館長の協力により、こ文ボランティアクラブの参加も決まりました。

(サ) 3月19日(土) ロビー交流DAY

前日に掲示物・配付物等の物品搬入を行い、本番当日を迎えました。幸い天気も回復し晴れ、一安心です。10時からメンバー3名、事務局2名、サポートメンバー1名、こ文ボランティアクラブの小学生6名と引率のこ文職員1名が集まり、役割分担、準備の流れ、会場レイアウトの確認を行いました。駄菓子の値札付けや、フェスティバル風の会場装飾を行う横で



だがし販売・お絵描き・昔遊び(輪投げ等)

は、開始の時間を待つ子ども達が現れはじめ、参加者たちの気持ちが少しずつ高まってくのが感じられました。

予定通り11時からスタート。イベント目当ての小さな子どもを連れた家族や、老人福祉C利用の高齢者が足を止めてくれる等、駄菓子屋やお絵描き、昔遊びに夢中になりながら、みんなが楽しそうに交流している光景は、イベントを企画して本当に良かったと感じる瞬間でした。

将棋を指す高齢者と小学生、コマの動かし方を周りの大人に確認しながら一生懸命自分たちで対局していた小学生たち。こ文ボランティアクラブの子たちにも、楽しんでもらおうと、交代制にして、楽しみながらボランティアを行ってもらいました。特にキットパスを使ったガラスお絵描きは大人気で、けん玉、お手玉、輪投げの昔遊びも人が途切れることなく、常に誰かが遊んでいる状況でした。

午後に予定していたバザーは、残念ながら出店参加申し込みが無かったため、昔遊びコーナーを継続実施することになりました。エクササイズでは、午前中とは異なる顔ぶれも見られ、一般参加者に職員も交じり、皆で楽しく行いました。今後へつなげるため、企画委員会を主体としての継続したネットワーク作りまで模索は続きます。一瞬の大きな花火ではなく、ゆるく長くという視点で癒しの空間を作っていく、行政は伴走者となりこれからの未来へ人と人がつながっていくこと。それを目指し、またその大切さを肌で感じた一年でした。



明るい雰囲気でのロビーでエクササイズ

(シ) まとめ

一般参加者数は、およそ40～50名程度でした。親子連れ（親と未就学児）、高齢者（主に老人福祉C利用者）、小学生などの多世代が参加し、交流を体現できた形となりました。ロビーに休憩にきた年配の方が、置いてあるお手玉3つを手にとって披露し、親子連れの方と交流している風景は、まさにさりげなさ、無意識のうちに気軽に立ち寄れる楽しさであり、思い描いた通りの展開が目の前に現れていました。

今後とも今回のロビーでの交流を一つの形として、まちのひろばが地域での暮らし、コミュニティ形成を継続してサポートしていけるよう、願うばかりです。



お手玉をこどもに見せる高齢者



イベント参加メンバー

イ おためしオンライン交流会（財政局かわさき市税事務所納税課 堀澤美佳主任）

（ア）オンライン交流で「まちのひろば」は作り出せる？

令和2年2月以降コロナウイルス感染拡大の影響で、対面での活動が制限される中、どんな「まちのひろば」が実施可能か、というのが私たちの大きな課題でした。対面での交流や飲食を伴う交流に制限がある中で、オンラインでのつながりも「まちのひろば」といえるのではないかと、という考えが浮かびました。人が集まれば、オンラインであっても、それは「まちのひろば」といえるのでは？私自身、オンラインシステムのZ o o mを使って様々なイベントに参加したことがあり、対面交流とほとんど変わりなく親睦を深めることができ、大変便利なシステムであると体感していたため、ぜひオンラインで「まちのひろば」を作り出したいと考えました。

（イ）8月感染拡大中。できることは何か？

私たち職員プロジェクトのメンバーがキックオフ会議を行った令和3年8月はちょうどコロナウイルス第5波の頃。コロナウイルスに罹患された方が隔離され、不安感や孤立感が高まっていることがメディアでも話題になっていました。

そこで、オンラインシステムのZ o o mを使って、コロナウイルス感染者の方の医療的相談以外の話を聞き、不安や孤立の解消に役立つことができるのではないかと考えました。

また、話を聞いて不安や孤独を解消するには、市内で活動する傾聴ボランティア団体のみなさまの力を借りるのがいいのでは、という案が生まれ、早速傾聴ボランティアの方々に私たちの考えた企画を説明する場を設定しました。

（ウ）9月見えてきた課題

エポック中原にて、傾聴ボランティアの方々の方々の現在の活動の様子を教えていただき、わたしたちの企画の説明をさせていただきました。

感染拡大中の9月は、傾聴ボランティアの高齢者施設への出入りができず、個人宅での傾聴もほとんどないという活動状況を伺いました。私たちの企画については、概ねご理解いただきましたが、課題として（1）1対1の傾聴ではなく、複数人数の話を聞く（グループ傾聴）という手法には慣れておらず、進行に不安がある。（2）オンラインシステムのZ o o mの操作に不安がある（3）傾聴ボランティア団体の定例役員会が開催できない状況のため、企画を諮ることができない、が挙げられました。

（エ）10月企画が停滞・・・代替企画を考案！

この頃は、オンライン交流の対象と考えていたコロナウイルス感染者が急激に減少し、企画が停滞してしまいました。コロナウイルス感染者向けの企画は一時棚上げし、代替企画として、Z o o mの操作に慣れてもらい、試しにオンラインでの交流できる「おためしオンライ

ン交流会」を立ち上げました。当初、この「おためしオンライン交流会」にも傾聴ボランティアの方に参画していただこうと提案しましたが、おためし交流会は短時間であり、傾聴ボランティアの参加意義があまりないというお返事でしたので、職員プロジェクトメンバーを中心に進め、傾聴ボランティアの方々には、一般参加者として企画に加わっていただけるようお願いしました。

(オ) 12月オンラインでデモ実施

12月中旬から、社会的孤立を感じる割合が比較的高い、高齢者等を主な対象と想定し、川崎市社会福祉協議会や老人福祉センターを中心にチラシ配架、また、「つなぐっどKAWASAKI」などへのWEB掲載で広報を行いました。

更に、職員プロジェクトのサポートメンバーにも協力してもらい、オンライン交流会のデモ実施をしました。前半は、Zoomの操作説明を行い、後半は2つの部屋に分かれて、企画進行中の他のプロジェクトについての意見交換を行いました。

デモ実施時のZoom操作支援について、サポートメンバーから「操作説明時は皆で同時に画面を見ながら操作するので分かるが、意見交換の時にいざ機能を使おうとすると、どのボタンを使えばいいのか分からなくなってしまった。」という感想があり、実際の交流会では操作説明時だけでなく、交流の時間にも積極的に機能説明のフォローを行うべきであると気づくことができました。

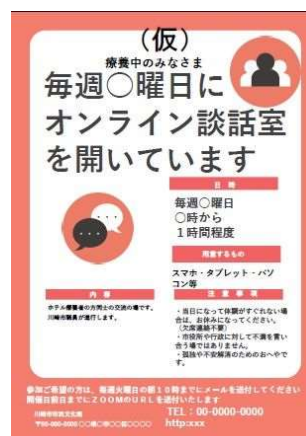


サポートメンバーと実施したオンラインデモ交流会

(カ) 1月(仮)オンライン談話室は断念

1月になると、再び新型コロナウイルス感染者が急増しました。当初の企画であった、感染者を対象としたオンライン交流について、川崎市内のホテル療養者が参加できるような企画を考えていましたが、庁内調整がつかず、今年度の職員プロジェクトでの実施は困難となりました。

また、代替企画である「おためしオンライン交流会」は、チラシやWEBで広報していましたが、参加申込みが少なかったため、第1回目の開催は見送ることとなりました。広報が足りないと感じ、新たに川崎市のホームページやフェイスブックなどで参加者を募りました。



(仮) 企画のままで終わってしまったチラシ

(キ) 2月オンライン交流会の実施

2月17日に参加者4名で「おためしオンライン交流会」を実施しました。私たちはZoomを使ったことのない方を想定して企画を立ち上げましたが、実際に参加された4名は、

みなさんZoomを使ったことのある方でした。そのため、基本的な操作は慣れている様子でした。その上でみなさんは、どのような動機でこの企画に申し込まれたのかを伺うと、「画面共有の方法を教えてください。自分以外の方がきちんと見えているのか確認したい。」「パソコン画面の写真（スクリーンショット）はどのように撮り、それはどこに保存されるのか教えてください。」といった、Zoomを主催する立場で、分からないことを質問したいというものでした。

そこで、その場で参加者全員を共同ホストに設定し、各自のパソコンから画面共有する方法や、スクリーンショットの撮影方法、ホワイトボードの使い方などを説明しました。参加者からは、実際にパソコンに触りながらその場で質問ができ、疑問が解決できたため、大変有意義な時間だったと感想をいただきました。参加者4名中3名の方が3月に開催するオンライン交流会にも申し込みされ、好評を得ることができました。



おためしオンライン交流会のチラシ

(ク)「まちのひろば」は作り出せる！そして、浮かんできたニーズ

今回の企画実施により、『オンラインでのまちのひろば』は作り出せる！ということがわかりました。2月に参加して下さった方々が引き続き3月の企画にも申し込みされたことは、「まちのひろば」のつながりが生まれたと言えると思います。

当初は、コロナウイルス感染者の方の不安感や孤独感を解消するためという目的で動き出した『オンラインでのまちのひろば』でしたが、代替企画であった「おためしオンライン交流会」の実施により、「Zoomイベントを主催してみたいが実際に練習する機会がないので、練習したい。」というニーズに気がつくことができました。確かに、主催者としてZoomイベントの練習をするためには実際にミーティングルームに入室し、画面を共有してくれる参加者がいないとできません。このような機会は今後ますます必要となってくるかもしれません。

3月のオンライン交流会は3月17日に実施。申し込みは定員の10名を超える人から応募があり、ニーズがあることを改めて確信しました。イベント終了後も交流できる場所として、フェイスブックの協働・連携推進課ページ内に、「おためしオンライン交流の会」グループを作成し、希望者には参加してもらうことにしました。

今後も参加者のみなさんのニーズをくみ取り、積極的にオンラインでのつながりを楽しめるようお手伝いし、『オンラインでのまちのひろば』の可能性を考えてきたいと思っています。

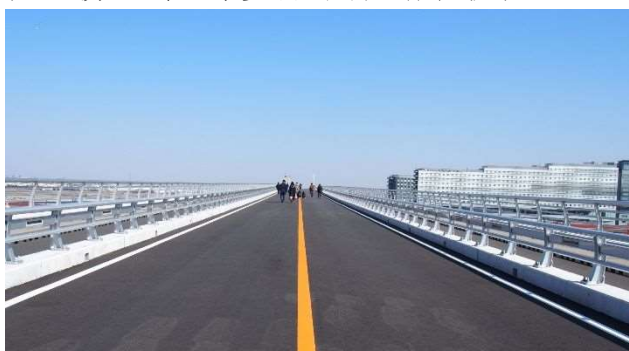


2月に実施したオンライン交流会

ウ 多摩川スカイブリッジフォトコンテスト&フォト交流会 (建設緑政局緑政部みどりの協働推進課 岡麻由美職員)

(ア) 多摩川スカイブリッジについて

多摩川スカイブリッジは、本市と東京都が共同で整備を進めてきた川崎市殿町（キングスカイフロント）と羽田空港（羽田グローバルウイングズ）をつなぐ新しい橋であり、多摩川の河口から1番目、世界との玄関口である羽田空港へつながる橋として、国際競争力の強化に向け、羽田空港周辺地域及び京浜臨海部の連携を強化し、多摩川兩岸の成長戦略拠点の形成を支えるインフラとなることが期待されています。公共施設・空間の利活用へのニーズが多様化する中、まちのひろば職員プロジェクトとしても、多摩川スカイブリッジの開通による新たなコミュニティの創出の可能性を探ることを目的とした検討を行うこととしました。



3月12日に開通した多摩川スカイブリッジ

(イ) 検討の経緯

8月に開催された、サポートメンバーを含めたオフサイトミーティングにおいて、多摩川スカイブリッジ開通のオープニングで、試験実施として新しい活用法を提案するという意見がありました。これを受けて、メンバーによる会議においても、新たな橋の開通というはなかなかないことなので、やれることをやってみたいと意見がまとまったため、活用に向けた意見をそれぞれ出し合いつつ、現地の見学や他のサポートメンバーの意見などを踏まえながら、実際に何を行っていくか決めていくことにしました。

10月6日（水）に、建設緑政局広域道路整備室羽田連絡道路建設担当の御協力により、建設途中の現地の見学を行いました。説明を受ける中で、橋の上であるからこそその制約が数々あることを確認し、その上で一体何が出来るのか、また、多摩川スカイブリッジ開通時期付近は、他の部署もそれぞれ特色ある企画を行っていたため、「まちのひろば」として実施することのキーワードを改めて考える必要がありました。その後、メンバーでの協議やZoom オンライン会議でのサポートメンバーから意見も踏まえ、人々がつながるためのツールとして、「写真」を活用した取組を行っていくことで決定します。

当初は、撮影講師との街歩きや写真の講評会、企業と連携した撮影イベントといった案があげられましたが、実現には至らず、写真という趣味を通したオンライン・オフライン両方でのつながりの創出を目指すため、インスタグラムを利用したフォトコンテストと、連携したフォト交流会を実施することとしまし



建築中の多摩川スカイブリッジを視察

た。

(ウ) フォトコンテスト

市民連携・協働推進課のInstagramアカウントをフォローした上で、川崎らしいつながりの写真を募集する「#かわさきのつながり」、もしくは橋上から撮影できる景色や多摩川スカイブリッジの写真を募集する「#多摩川スカイブリッジ開通」のハッシュタグをつけて写真を投稿することで参加できる仕組みとしました。開通日までに数々のイベントが予定されていたため、その参加者にも参加していただけるよう広報を行うこととし、募集期間は開通日当日の3月12日(土)までとしました。集計中ではありますが、「#かわさきのつながり」には25件、「#多摩川スカイブリッジ開通」には112件の投稿がありました。各部門、「いいね」の数で集計を行い、市HPで結果を公表しました。ハッシュタグを辿ることで素敵な写真が見られますので、多くの方にご覧いただき、Instagramでのつながりが広がっていく機会になってほしいです。



2つのテーマで行ったフォトコンテスト

(エ) フォト交流会

2月27日(日)に、フォトコンテストと連携したオフラインでの取組としてフォト交流会を実施しました。実施に至るまでに、羽田連絡道路建設担当や臨海部国際戦略担当に御協力いただき、LiSE(川崎生命科学・環境研究センター)の会議室をお借りしたり、LIC(ライフイノベーションセンター)の屋上からの撮影させていただけることになったりと、普段市民の方が入ることが出来ないところを開放することも参加のメリットとすることが出来ました。

当日は、事前申し込みいただいた参加者の方に各々の思う場所で多摩川スカイブリッジを撮影していただき、その写真を皆さんで共有して、撮影のポイントや今日の思い出を語っていただくことにしていましたが、撮影時間を延長したことにより、交流の時間をあまり取る事ができないことになってしまいました。時間配分については心残りもありますが、御参加いただいた10名の方はそれぞれ撮影を楽しんでおられ、冒頭で実施した職員からの説明も興味深く聞いていただけたようで、市の施策を身近に感じる事が出来る貴重な機会を提供できたのではないかと思います。



開通前のスカイブリッジ橋上(写真上)や同ブリッジが見える建物屋上からの写真撮影会(写真下)

(オ) 感じた課題と今後に向けて

今回のフォトコンテスト・フォト交流会を通じて、特に課題と感じた点を2つあげたいと思います。

一つ目は、「写真を撮る」とことと「交流をする」とことの両立の難しさです。とにかく撮影をしたいという方もいらっしゃれば、写真を参加者の皆さんで共有する時間があまりなくなってしまうことを残念に思う方もいたので、趣味を軸にした交流の難しさを感じました。しかしながら、参加者の皆さんには「写真を撮ることに興味がある」という共通点が必ずあったはずなので、共通点を生かしたつながりづくりについて改めて考えたいです。

二つ目は、今回の企画は地域の方とお話をして広げていく、というものではなかったため、行政主体となりましたが、市民が多摩川スカイブリッジで知りたいこと・やってみたいことは他にもあったかもしれません。気軽に意見を聞くことができる場の必要性を感じました。

多摩川スカイブリッジでの取組は特殊な事例であったかとは思いますが、公共空間や公共施設をもっと自由に使っていただくためには、とにかくその施設について知っていただくことが大切なのではないかと感じました。行ったことがない近所の公共施設や公園というのは多くの人にあると思います。市内にはほかにも魅力的な場所がたくさんあるので、今回の取組を通じていろいろな場所に行ってみたい、施設を活用してみたいと思うようなきっかけになっていることを願います。



LiSE 会議室で参加動機や自己紹介などを行った

(5) YouTube で活動を発信

これまでの活動では、取り組みをまとめた広報紙の発行などを行ってきましたが、今年度は更なる活動の見える化を図るため、YouTube の川崎市コミュニティチャンネルにて動画投稿を行いました。動画作成にあたっては、打ち合わせや現地視察など活動当初から計画的に動画撮影を行いました。蓄積した動画に加えて、イベント実施の告知をプロジェクトメンバーに行ってもらうため、仮設スタジオでの収録を行いました。※視聴回数は、令和4年3月末時点で130件を超えています。



動画が見られる2次元コード



川崎市コミュニティチャンネル

(6) 活動報告会

3月16日(水)に実施をしたZoomでの協働・連携研修「町内会・自治会と行政との真のパートナーシップについて」との同時開催として「活動報告会」を行いました。

事務局から同プロジェクトの概要説明を10分、参加メンバー3名から各15分で実施、広聴者は研修参加者等約30名でした。

4 まとめ

今年度は、2つの事業で市民や事業者のフィールドでのチャレンジとなりました。

コロナ禍で思うように交流がすすめられないという課題に対し、オンライン交流の主催を考えている方等に、オンラインを通じた交流とともにZoomの活用方法のレクチャーを行いました。2つ目は、ロビーを活用した多世代交流を目的に、施設管理者や施設利用者とイベント実施を行いました。私たちの活動がきっかけでイベント参加者や運営関係者自らが実施するきっかけになったらと願うばかりです。

1年間という長いようで短い期間の中では、グループ内での目標到達地点のイメージの共有とともにテーマ・フィールドの選定が重要です。さらには「協働」における私たち職員の役割を事前にしっかりと確認し・議論することが、地域に出て活動をする上では必要な事だと、改めて感じました。

今年度の参加メンバー3名は、ひとり一事業を担当し、他事業のサポートを行いました。事務局2名及びサポートメンバー7名がサポートしたとはいえ、それなりの負担があったと思います。一方、少数精鋭だったからこそ、参加者全員が責任感を持って活動してくれましたし、コーディネート力や業務遂行能力など、身に付いたものも大きかったのだと思います。

チーム活動には、協調性、リーダーシップ、熱量など様々なことが求められます。個人個人の考え方やモチベーションの差に困惑することも、往々にしてあります。今回の3人は、熱量や目的・課題意識をもって真剣に取り組んでくれましたし、意見の相違、外部組織や市民との調整の中でも、考えを共有し丁寧に進められたと思っています。これらの経験

は、それぞれの職員としてのスキル向上に寄与するものであったと思います。

最後になりますが、これらの活動に事務局として伴走させていただいたメンバーには感謝の気持ちで一杯です。



プロジェクトメンバーと事務局の5名
(前列左から) 岡職員、能塚係長、堀澤主任
(後列左から) 小西事務局担当職員、外山事務局担当係長